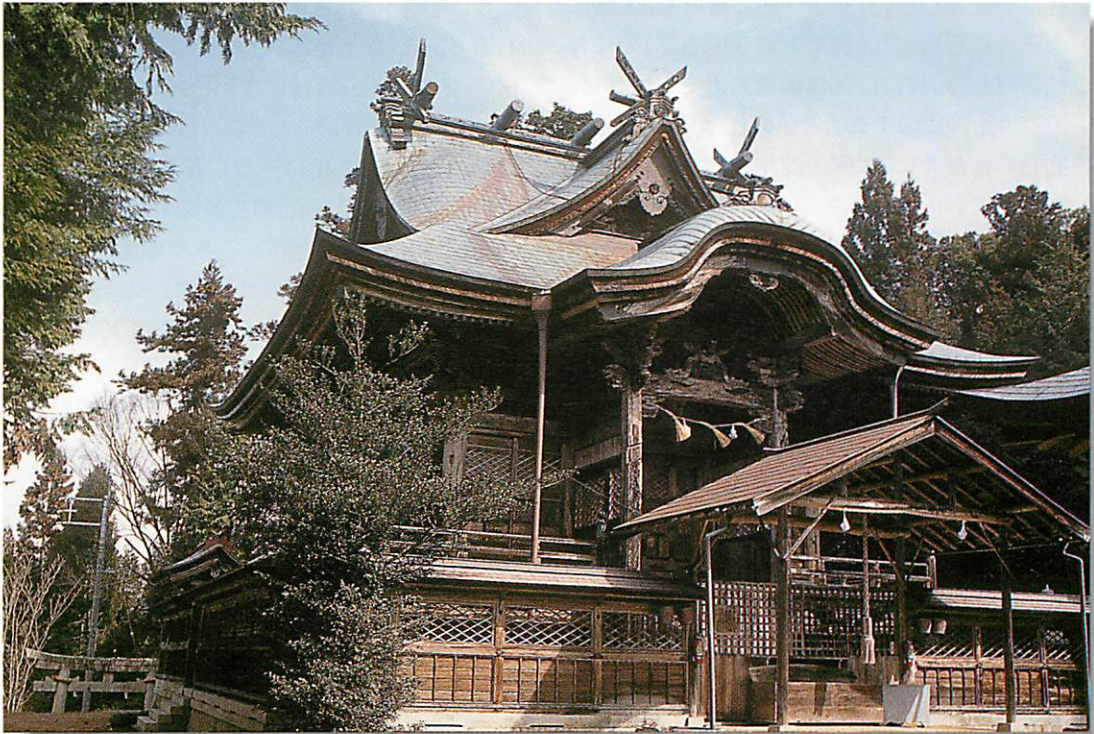


大博物館

NO. 30
2001.4

津山郷土博物館

だより



▲^{きやま}木山神社本殿 岡山県指定重要文化財 真庭郡落合町木山

標高414mの木山山頂にある。旧県社。祭神は素盞鳴命。弘仁7年(816)の創祀と伝える。古くは木山牛頭天王といい、感神院と号す。棟札によれば、天正5年(1577)隨身門を除き全焼し、同9年(1581)再建するという。応永18年(1411)守護赤松義則が田畠を寄進したのをはじめ、戦国時代から津山森藩時代にかけて諸大名の崇敬が厚かった。近世には真島郡南三郷及び近隣5箇村の総鎮守であった。また牛馬・殖産の神として、美作・備前・備中・備後・伯耆・出雲などから、当社と木山寺に参詣する木山詣が盛んであった。

現本殿は天正9年再建時の建築で、寛文3年

(1663)、明暦3年(1657)、元禄2年(1689)にそれぞれ修理されている。桁行三間(8.1m)、梁間三間(7.2m)。平入、単層、入母屋造で屋根は檜皮葺(現在は銅板張)である。正面に千鳥破風をもうけ、向拝を唐破風造とする。基壇の上に花崗岩で亀腹様の基礎をつくり、その上に南向きに社殿を建てる。柱は径35cmの円柱を用い、高さ2mの位置に回縁をまわしている。軒は二軒繁垂木、組物は支輪をもつ出組で斗拱の間には臺股を配している。内部は4本の柱で外陣・内陣・内々陣に分け、天井は外陣が竿縁天井、内陣が根太天井、床は畳敷である。

1

『続本朝往生伝』に次の記事がある。

沙門日円は、もと天台の学徒なりき。後には菩提心を発して、身を巖き谷に隠せり。金峯山の三の石窟に住し、長く米穀を断ちて、殆に神仙に似たり。後には美作国真島山に移住せり。当国隣国の欽仰すること仏のごとし。清涼山を礼せむがために、大宋の商船に附きて渡海す。後にかの朝の天台山国清寺において入滅すと聞けり。臨終の相、往生疑いなし(『往生伝・法華験記』〈日本思想大系7〉岩波書店、1974年)。

これによれば、天台宗の僧侶日円は菩提心を起こして大和国吉野の金峯山に入り、のち美作国真島山に移って修行し、近隣から仏のように信仰されたという。『続本朝往生伝』は平安時代後期の文人貴族大江匡房が編纂した浄土往生人の伝記で、その成立は康和3年(1101)をほど遠からざる時とされている(同上・728頁、井上光貞執筆)。また『拾遺往生伝』巻下・定秀上人伝にも「(前略)寂として入滅せり。顔色変せずして、温氣猶し残れり。時に承保三年三月三日、行年六十四なり。この時に日円上人あり、俗呼びて美作の聖と云う。(後略)」(同上)とあり、承保3年(1076)に日円が美作に住していたことがわかる。なお、『権記』寛弘8年(1011)6月25日条の一条天皇葬送記事の百僧の中に日円がみえる(同上・441頁)。上の『続本朝往生伝』によれば、日円の美作移住は中年期以降のことと思われ、『権記』の1011年は美作居住の定点の1076年の65年前にあたるので、年齢的にみて両者は別人であろう。このように、日円はおよそ11世紀前半頃に出生し、国内で山林修業したのち入宋し、11世紀末ないし12世紀初頭頃浙江省天台山において没したことがわかる。そこで問題にしたいのは、この日円が入宋前に修業したという美作国真島山とは何かということである。

2

前述のように、沙門日円は聖(ひじり)とも呼ばれ

ている。聖とは、主として山林修業によって宗教的呪力を獲得した行者のことで、11世紀から12世紀にかけて、南都北嶺等の既成教団の外部に輩出したものである(井上光貞『日本古代の国家と仏教』岩波書店、214・215頁)。『梁塵秘抄』巻二・僧歌298に「聖の住所は何処何処ぞ、大峯葛城石の槌、箕面よ勝尾よ、播磨の書写の山、南は熊野的那智新宮」(『梁塵秘抄』閑吟集・狂言歌謡』〈新日本古典文学大系56〉岩波書店、1993年)とあるように、これらの聖たちは地方の靈山にこもって山林苦行に従事した。日円が最初に修業した金峯山も、このような靈山の代表的存在である。すなわち、金峯山とは奈良県吉野郡吉野町の吉野山から山上ヶ岳(大峯山・標高1720m)に至る山岳地帯の総称である。『万葉集』に「み吉野の耳我(みみか)の嶺(巻1-25)」「み吉野の御金(みかね)の岳」(巻13-3293)などがあるように、古来山岳信仰の靈場であった。8世紀頃から神仏習合の道場化し、当山で修業した験者のことが『日本靈異記』などに記されている。上の史料にあるように、日円もかかる験者の一人と考えられ、その日円がのちに移った美作国真島山も単なる自然の山ではなく、吉野の金峯山と同様の山岳仏教の靈場と理解すべきであろう。

3

では、このような美作国真島山とは具体的にどの山を指すのであろうか。真島を冠しているので真島郡に所在したことは確実であるが、現在旧真島郡域内に真島山と称する山は存在しない。『和名抄』によると、真島郡には真島、垂水、鹿田、大井、栗原、美甘、建部、月田、井原、高田の10郷がある。よって真島山とは、ひとまず真島郷に所在したと推測することができる。古代の真島郷は旭川の右岸、現落合町日名・高屋・福田一帯と推定される。したがって真島山の探求はそれら周辺に所在する山岳仏教の靈場にふさわしい山を求めればよいことになる。

そこでまず想定されるのが、真庭郡久世町神にある神林寺である。これは旭川南岸の標高約500mの山上にある寺院跡で、『吾妻鏡』元久2年(1205)5月12日条に、「美作国神林寺内、奉為故幕下將軍家追福、欲建三重塔婆」とあるのが確実な史料上の初見である。しかも元禄4年(1691)成立の『作陽誌』に真島郷に位置づけられており、先の条件とも合致する。しかし、同書真島郡寺院部条によると、神林寺の開基は後白河法皇の時代(12世紀末)入唐僧円訢が唐から持ち帰った仏舎利をもっておこなったとされているので、11世紀末に日円が美作聖として、近隣から崇敬されたという『続本朝往生伝』等の記述とは矛盾する。

次に注目されるのが、真庭郡落合町木山にある木山寺(神社)である。これは標高414mの木山山頂にある山岳寺院で、明治初年の神仏分離令まで、隣接する木山神社の別当寺であった。木山神社は木山牛頭天王と号し、また感神院ともいい、古来農耕・牛馬・殖産の神として広く信仰された。元禄15年(1702)の『医王山木山寺旧記写』(『岡山県古文書集』第二輯)によると、木山寺は弘仁年間(810~823)弘法大師空海の開基で、のち文徳天皇の勅願寺となったというが、確実なところでは、応永18年(1411)4月22日付け赤松義則寄進状(同)に、「美作国南三郷内惣社」とあるのが史料上の初見である。このように木山寺(神社)は史料上では15世紀初頭までしか溯ることができないが、神仏習合の霊場として現在まで広く崇敬されていることなどからみて、『続本朝往生伝』にみえる「真島山」を木山寺(神社)に擬定するのが最も蓋然性が高いのではなかろうか。

ところが、『作陽誌』などを参照すると、木山寺(神社)は鹿田郷に所在したと考えられ、真島山が真島郷に所在したとする、先の推定と齟齬することになる。この問題については郡(こおり)遺跡の存在が参考となる。これは落合町鹿田字郡の河岸段丘上にある弥生時代から平安時代にかけての遺跡である。1999年11月から2000年3月にかけての落合町教育委員会の発掘調査で、奈良時代から平安時代にかけての掘立柱建物8棟などが検出されている。そのうちの最大の建物は東西3間(7.2m)、南北5間(10.6m)の南北棟で、東側に廂をもつ。柱穴掘形は一辺80cmで柱痕跡は直径20~30cmを測る。その東約150mに総柱建物4棟、北々西約100mにも総柱建物1棟がある。

これらの建物は方位が南北ないし東西にほぼ統一され、かつ柱間も規模も規格的である。出土遺物は須恵器、土師器、円面硯、瓦などである。

真島郡家については、古くから落合町高屋付近と考えられてきた(永山卯三郎『岡山県通史』岡山県、1930年など)。1979年から1982年にかけて落合町教育委員会により発掘調査が実施され、奈良時代の掘立柱建物などが検出されたものの、それらの建物は小規模で、かつ官衙の様相の遺物も出土していない(『福田B遺跡・高屋B遺跡』落合町教育委員会、1983年)。一方郡遺跡は、「こおりの地名があること、建物が大型で規格的であること、瓦が出土するが寺院跡とは考えにくいこと、硯の出土は文字を理解する識字層の存在を示すことなどを総合的に勘案すれば、真島郡家の蓋然性が高い(以上、「郡遺跡現地説明会資料」1999年11月14日、落合町教育委員会などによる)。

とすれば、郡遺跡は古代の鹿田郷にあると考えられるので、木山寺(神社)と郡遺跡は同一郡に所在したことになる。のみならず、郡遺跡は木山の山麓にあり、遺跡からは木山を背後に仰ぎみることができ。このような郡遺跡(真島郡家)と木山との地理的一体感からすれば、木山寺(神社)が郡名を冠して真島山と呼ばれることは大いにありうることであろう。

4

以上、『続本朝往生伝』にみえる美作国真島山が、現真庭郡落合町木山にある木山寺(神社)にあたることを述べてきた。もしこのような見解が成立するとすれば、木山寺についての新たな知見を加えることができる。すなわち、従来木山寺(神社)の確実な初見史料は前述の応永18年(1411)赤松義則寄進状であったが、本史料によって一挙に11世紀後半頃まで三百数十年も溯ることが可能となった。またその真島山とは単なる自然の山ではなく、聖の住む山岳仏教の霊場であったと推定される。前述の『梁塵秘抄』に歌われる諸山からも窺えるように、かかる霊山は日本古来の山岳信仰を基礎とする例が多い。とすれば、木山信仰も8世紀頃以前の山岳信仰に溯る可能性があることになろう。

(湊 哲夫)

平成13年度 博物館行事予定

行事名 日程	展 覧 会	町奉行日記を読むⅣ 古文書講座	飛鳥を考えるⅡ 古代史講座	夏休み子供歴史教室 弥生土器をつくる	美作の文化財めぐり (友の会)
平成13 3	企画展 日本 ^{3/31} の美 ^{4/15} 一刀剣・刀装の優品から				
4					
5		●5/10		●5/24	●5/20
6		●6/14		●6/28	
7		●7/12		●7/26	●7/24 ●7/25
8				●8/16	
9		●9/13			●9/16
10	特別展 津山藩 ^{10/13} の江戸屋敷 ^{11/12}	●10/11			
11		●11/8	●10/25		●11/11
12			●11/22		
平成14 1		●1/10			
2		●2/14			
3	企画展 美作 ^{3/16} の渡来文化 ^{4/21}	●3/14			●3/10
4			●3/28		

博物館入館案内

- 開館時間：午前9：00～午後5：00
- 休館日：毎週月曜日・祝日の翌日
12月27日～1月4日・その他
- 入館料：小・中学生 100円（80円）
高校・大学生 150円（120円）
一般 210円（160円）
※（ ）は30人以上の団体

博物館だより No.30 平成13年4月1日発行

編集・発行：津山郷土博物館
〒708-0022 岡山県津山市山下92
☎(0868)22-4567 函(0868)23-9874

印刷：(株)廣陽本社

は津山松平藩の捺印で剣大といい、現在津山市の市章となっている。